

俺の清姫が女子力高い系男の娘だったのだが・・・

金欠生首

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あ・・・ありのまま、今起こったことを話すぜ。

『女子力高い系男の娘清姫・・・アリだなー！』

そんな事を考えてたら何時の間にか書き上げていた。

超スピードだとか超能力だとかそんなチャチなもんじゃねえ。

何か・・・こう・・・恐ろしいものの片鱗を味わった気分だけ。

目次

俺の清姫が女子力高い系男の娘だったのだが・・・	1
俺の清姫が女子力高い系男の娘だったんだが別にいいよね？	4
後輩が俺の知ってる後輩じゃなくなってるんだが……	7
俺の清姫が可憐過ぎるんだが	13
俺の清姫はお酒に弱いらしいんだが	16
俺の清姫の揉み心地がいいんだが	19
俺の清姫と温泉に来たが理性が保てそうに無いんだが	22
俺の清姫とイチヤイチャしてるだけで幸せなんだが………	25
俺の清姫と温泉街d……散策	28
俺のマスターとしての役目は終わったのだが……	32
俺と清姫の事なのだが……（設定）	37
俺の故郷に清姫達と来たわけだが……	40
俺の清姫達と実家に向かっているわけなんだが……	43

俺の清姫が女子力高い系男の娘だったのだが・・・

「んあ・・・朝か」

【朝】・・・それは、太陽が顔を出し、生命が活動を始める一日の始まりとも言える時間。

人理継続保障機関・カルデアにある俺のこの部屋にでもそれは同じ事。

俺は歪んだ歴史の修正と様々な英霊達との珍道中で疲れきった体を起こし、今日も歴史の修正に尽力を尽くす為に布団から出ようとした・・・しかし、そんな時にふと下半身に重みを感じ布団を剥がした。

「あ、おはようございませす。旦那様♪」

「ああ、おはよう清姫。・・・とりあえず、俺の股の間から顔を出すな・・・と言うか、何時からそこにいた？」

俺の股の間から可愛らしい顔を覗かせるのはこの前のフランスでの定礎修復の際に会い、そのまま契約を結んだ狂者バーサーカーのクラスを持つ英霊の【清姫】だ。

「フフ・・・ないしよですわ。「おい。嘘が嫌いな癖に嘘をつくな」そ・・・そんな事より、朝食をお持ちしましたわ。旦那様♪」

「ああ、有難う。ところでその朝食は何処にあるんだ？」

見る限り何も持っていない清姫しか見えない俺が飯がどこにあるかと聞くと清姫は答えてくれた。

「何処も何も・・・私が朝食ですわ。旦那様♪」

「は？」

・・・いつは何を言っているんだ・・・全く持って分からん

「だから、私が旦那様の朝食なのですよ」

「いや、ナチュラルに心を読むな」

「フフ・・・。旦那様♪」

「なんだ・・・って、うお!？」

俺が答えようとした瞬間に清姫が俺を押し倒してきた。

「清姫! 危ないだろうが!」

「フフフ・・・大丈夫ですわ、旦那様♪ 下が布団なのを理解した上で

やっていますから♪」

「だからってなあ．．．んツ!？」

俺が清姫を注意し、そろそろ日課である戦闘訓練に行こうと計画していた時に清姫は俺の口を塞いできた。

所詮、『キス』と言うやつだ。

ゆつたりと貪るようなキスになすがままにされていたのが尺で引き剥がそうとしたら頭をしつかりとホールドして舌まで絡めてきやがった。

俺は逃げられないと悟るとそのまま清姫が満足するまでキスにつきあう事にした。

結局、解放されたのはそれから3分後の事だった。

．．．ほのかにショートケーキの味がして美味かったと言うのは黙っておこう。

「フフ。ごちそうさまですわ旦那様♪」

「お前、あくまで朝食を持ってきた筈だろうが．．．」

「あら。そうでしたわ。私ったらドジな人」

「はあ．．．もう良いからさっさと俺の上から降りてくれ」

「．．．しょうがないですわね。本当はもつと楽しみたかったのですが」
少し不満げに漏らしながら俺から降りて横に寝そべると清姫は再び俺の方を見ながら微笑んだ。

「ところで旦那様♪ 朝の処理は手伝わなくてよろしいのですか？」

旦那様が望むなら、この清姫は何時でもこの体を、舌を．．．清姫という存在すべてを使ってご奉仕して差し上げますわ」

女なら確実に抱いているだろう．．．確かに見目は絶世の美女である俺の清姫だが実は秘密があった。

史実通り巨大な蛇への変身能力ともう一つ．．．ある秘密が

「それに．．．私の方が誰よりも旦那様を満足させられますわ。殿方の感じる所は．．．私も感じますから」

そうこの目の前で顔を赤らめる清姫は男なのだ。

しかし、見た目はどう見ても女そのもの．．．つまりは『男の娘』というやつだ。

その上、料理も上手く家事もこなせる以上に高い女子力を持っている。

正直、女だったら本気で旦那様になろうかと思ってたくらいだ。

そんな俺の気持ちも気にせず俺の槍を撫で、肌蹴ていた服の隙間から俺の胸板を舐め上げる清姫に対して俺は流石に我慢しきれずに清姫に覆い被さった。

「へ？ 旦那様？」

「清姫。そんな事を言うなら・・・本当にしてくれるんだろうな」

「ま・・・旦那様!？」

「ほら、シてくれるんだろ？ その可愛い口や体を使って」

「そ・・・それは・・・」

耳まで真つ赤にしながら恥ずかしがっている可愛い清姫を一通り堪能すると俺は布団から出る事にした。

「全く・・・俺をあまりからかうな。ほら、着替えたいから部屋から出てくれ」

「・・・はい」

顔を真つ赤にしたままの清姫が部屋を出て行くのを確認してから何時もの様に着替えと身支度を済ませると机の上にサンドイッチの皿が置かれているのに気がついた。

多分、清姫が置いていったのだろう。

「全く・・・あいつも馬鹿な事をせずに素直に渡せばいいのに・・・」

そう呟いて食べたサンドイッチは前に清姫に話した懐かしき好物の味がした・・・

「・・・あいつが本当に女だったら良かったのにな・・・」

そんな絵空事と共にサンドイッチを飲み込むと俺は気持ちを切り替えて定礎復元の為に部屋を出た。

俺の清姫が女子力高い系男の娘だったんだが別にいいよね？

「お疲れさんです」

今日も今日とで特異点の修復を進めてから帰って来るといきなり清姫に拉致され、問答無用で自室に連れ込まれた…

「はむ…：…ますたあゝあむ…：…私は連れてって…：じゆる…：…くれないのですか？」

この前、霊基再臨してから着ている黒の着物を纏い、舌で耳を責める艶かしい姿に情欲を掻き立てられながらも最近の事を考える…：…。

確かに、最近は新しく入った邪ンヌや最古参メンバーのカーミラさんにオルタといった悪染めばかりで行ってるなあ…

「ごめんな、きよひー。最近、構ってあげられなくて」

「んっ…あむ…：分かれれば良いんです」

そう言っつて耳責めをやめる清姫について、物惜し気な声を上げてしまった。

「ふふ…：…ますたあ ♡ もしかして…：もっとしてほしいのですか？」

そ、そんなことはない！…：…と言えない自分が悔しい。

「もう…：…ますたあつたら、私みたいなのに欲情して…：そんなに舌でじゅぼじゅぼしてほしいんですかあ？」

ーもう…：清姫が男の娘でもいいよな？ー

唾液をたつぷりと含んだ舌で舐めあげてくる清姫の舌を摘まんで口の中へと含む。

「ま…：…まふたあ？」

目の前で喋る清姫…：黒の着物にその白い肌が映え、そこにうつすらと光る汗すらも宝石に見える。

「あ…：あのー…：」

清姫の戸惑う声すら愛しい。

そう感じた後の事は覚えていない。

気づいた頃には既に蕩けた顔の清姫をベッドに押し倒していた。

「あ……あのくまずたあ？」

下から見上げるように見つめる清姫に身体を支配している劣情を全てぶつきたい……だけど、一般枠だったとはいえ、マスターたる自分が魔力が足りないわけでもないのに英霊と身体を重ねて良いのだろうか。

二つの感情が渦巻く下、清姫は……

「うう……ぐすつ……ますたあ……ひつく……」

泣いていた。

「き……清姫」

まさか泣くとは思わなかったが……冷静に考えれば子供でもわかる様な事だった。

「ご……ごめん。そんなに嫌だったんだn」

謝って許される事では無い。それでも、謝ろうと思いい口にしていると謝り終わる前に清姫に手を引かれ、倒れ込んでしまった。

「ま……ますたあは私を抱きたいんですか？」

嫌われた……それに相手は英霊と呼ばれ、人より遥かに強い存在……殺されるな。

そう思った俺は正直に答えると予想とは違う答えが帰って来た。

「……私は、その……何故か男の身体ですがそれでも抱きたいですか？」

——もちろん。そんなの関係なく……清姫を愛してしまったからね

そんな月並みな台詞を言いながら目を閉じると口内に何か……いや、清姫の舌が入ってきた。

互いを求めあうかの様に舌を絡め、口を重ねた。

獣の様な荒々しく相手を求めるキスを続けながら強く抱きあった。酸欠になりそうな時、清姫がキスをやめて胸元に抱きついてきた。

「私……こんな体だから、ますたあに恋をしても思いを遂げられないとばかり思っていました……」

泣きながら身の内を吐露する清姫を優しく抱き続けた。

そして、しばらく泣き続けてからベッドに倒れ着物をずらしてから口を開いた。

「ますたあ……貴方の愛する私の身体……存分に召し上がってくださいませ」

そこからは……時間を忘れ、まるで蛇の様に濃密に身体を重ねあわせた。

――――

夜の廊下

「私が……先輩を守らなくては……あの蛇から……」

微かに響く饗宴を扉越しに聞いた一人の少女は……暗く、虚ろな眼差しで扉から離れて部屋への道を歩いていった。

後輩が俺の知ってる後輩じゃなくなってるんだが
……

どうも皆さん、○○です。

突然ですが……助けて。

何からって？

それは……

「先輩?? あーん??」

目の前であーんしてくる後輩からです、

あ、待って！ 解散しないで！ 舌打ちしないで！ 本当にマジで
ヘルプミー！

「ふふ♪ 私の手料理は美味しいですか？」

美味しいよ……普通に美味しいよ……でも

「美味しいですか……えへへ」

いや、ナチュラルに思考読んで喜ぶとか怖いんだけど……まずここ
どこ？

確かレイシフト終わってから種火回収の為に仮眠室で少し寝てた
筈んだけど……ここどう見ても個室だよな？

「あ、ダヴィンチさんが『時間あるから仮眠じゃなくてキチンとした睡眠を摂らせておいて』と言っていたので私の部屋に運んだのですが
……もしかして、嫌でしたか？」

ここは後輩の部屋だったのか。

部屋にはないレイディ特有の甘い香りがするわけだ……正直、清姫の
匂いがしないから自室じゃないとは分かったんだけど。

あれはもうあれだよ……嗅ぐタイプの愛の妙薬だよ。

部屋に帰るだけで安心する。たまに……というか一緒に戻る時以外
は清姫本人もいるからマジで天国……というかね、部屋に入って
早々に清姫が胸元に抱きついて顔をスリスリと擦り付けてくるんだ
よ。

そして深呼吸してから

『お帰りなさいマスター。……あの、もう少しマスターの匂い嗅いでもいいですか?』

つて、上目遣いで聞いてくるんだよ。もう好きなだけ嗅いでくれて感じだよ。最初の頃に他の女性サーヴァントの匂いもしてるかもしれないけど怒らない? つて聞いたら

『マスターの匂いが一番強いのであまりしませんよ。ああ、臭うと言う意味ではありませんよ。それに……他の女性に好かれる程の魅力のあるマスターを独り占め出来るのですから少しくらいじゃ怒りませんよ』

つて、言うんだよ。もうそこからは互いの匂いを堪能してじやれあってまあ魔力供給するんだけどその時の顔がまたこれが……つてか、清姫つて犬っぽいよね。鬼ヶ島の時も犬発言してたから首輪着けてもいいよな? つてか、つける。つけてずっと撫で続ける……今度何処かで首輪手に入れてこよ。

……つと、話が脱線しすぎたな。

そつか、後輩の部屋か……そろそろ本題に戻ろう。

え? 最初から後輩つてわかってて助け求めただろうつて?

まあそうなんだけど……なんで助けて欲しいかって言うとな

ーあの……後輩ー

「はい。何ですか先輩?」

ーなんで俺ー

「どうかしましたか?」

ー縛られてんの?ー

「それは……先輩が悪いんですよ」

……Why, Why, Why, Why——y?

「私に色んなはじめてをくれたのにあんな蛇と結ばれるなんて」

……え? てか、言い方言い方

「なんで清姫さんなんですか……清姫さんは男じゃないですか」

……女性なんだけどね。なんやかんやで男の娘で現界したけど女性だよ。それと滅茶苦茶可愛い。

「先輩つて……そつち系だったんですか?」

「違うよ!?」 好きになった清姫がたまたまそうだっただけでー

「もしかして、アストルフオさんやデオンさんにも手を出してたり……」

「してないよ!?!」

「本当ですか?」

「本当だよ!?!」

「先輩は自分の子供とか見たくは無いですか?」

「……子供か……サーヴァントとは出来ないだろうけどもし出来たら……きつと可愛いんだろうなあ。」

「先輩……清姫さんとだと同じ性別同士……その機会は無いですよ」

「知ってる。それを覚悟の上で好きなんだ」

「……私は先輩との子供……欲しいです?」

「……え?」

「だから……」

「ちよつとタンマタンマ!!」 俺には清姫がいるから!!」

「でも、同性同士だと出来ないこともたくさんありますよ?」

「それでも清姫を裏切るような事は出来ない」

「私はデミサーヴァントですから子供も出来るかもしれないよ?」

「それでも?」

「それでも」

「私の身体を好きにしているんですよ。女性だから清姫さんにはない……ここも……ここも使えるんですよ?」

「それでも俺は清姫を選ぶ」

「何時でも何処でも先輩のお願いだったらなんでも聞きますよ?」

「なんでも?」

「はい。なんでも」

「だったら……」

「先輩……」

「こんなこと、止めてくれないかな」

「え……」

「後輩……いや、マシユはここから外に出た事無いんだっけ?」

「はい。レイシフトを含めなければカルデアから外に出た事はありません」

「じゃあさ。もし人理焼却を防げたら外に出て……街にでも遊びに行つてきなよー」

「……」

「きつと、色んなはじめてが待つてるしきつといい出会いにも巡り会え「ません」……」

「先輩は私にたくさんのはじめてをくれました」

「さつきも言つてたねー」

「草原の爽やかさ。海の香り。雲一つ無い青空……全て先輩が教えてくれました」

「すぐに戦闘になることが多かったけどなー」

「それでも……私にたくさんのはじめてをくれたのは事実です。だから、これからもたくさんのはじめてを先輩から受け取りたいんです。これから先……死ぬまで一緒に」

「……」

「だから……」

「……悪いけど、死ぬまでは無理かなー」

「……」

「……だから、これからも先輩後輩として仲良く「嫌です」」

「……決めました。やっぱり蛇なんか先輩を渡したくありません。先輩は、私が守ります」

「……気持ちは嬉しいけど遠慮した＼ガアン！／……ヒイイツ！？」

「先輩は清姫さんの魅了に掛かって騙されているんです。私が先輩をお守りします」

「魅了か……確かに清姫は可愛いからな……特に夜なんて＼ガアアンツ／」

「先輩。これからは安心してくださいね。清姫さんにこんなこと辞めさせて先輩を元に戻してみせます！」

「いや、騙されて無いからね。相思相愛だからね！」

「だから……先輩」

「流れ弾でクーフリーンが死んだ!？」

「この人でニヤシー!」

「……誰か!」

「お? 喧嘩か! 盾の嬢ちゃんもやるじゃねえガフツ!」

「飛んできた破片がキヤスタアのクーフリーンに当たったぞ!」

「この人でな「まだ死んでねえよ俺!」」

「この拘束ほどこいてえええええ!!」

俺の清姫が可憐過ぎるんだが

「マスター！ 飲んでるかーい！」

ーああ、飲んでるよ。ドレイクの姐さんー

お茶だけだね。俺、お酒駄目だし。

それにしても花見か……これも俺達が人理修復に力を注いできたお陰……ってのは、自惚れってやつかな。

「いや。そんな事は無いと思うよ」

ードクター……顔に出てたか？ー

「んー……どうかな？ 僕には何か悩んでる様に見えたけど？」

ーまあ……ちよつとねー

「折角、人理修復の合間に出来た束の間の休息なんだからしつかり楽しまないと……ガス抜きは大切だよ」

ーそうだなー

「そうそう。その為に人があまりいなくて尚且つ綺麗な桜のある所に特別にレイシフトしたんだから」

「そんな事言つて……実は自分が一番見たがってた癖に」

「それは言わないお約束だよ」

ードクター……ー

「あはは……で、どうだいダヴィンチちゃん。この満開の桜は？」

「ふむ。悪くないね。これが侘寂ってやつか」

ーどうだろう？ー

「ま、■■君も悩みは忘れて、今日は楽しもう！」

「そうそう。それにこれは君へのご褒美でもあるんだからね」

ーどういうことだ？ー

「君はこれまでとてつもない早さで五つの特異点を修復しただろ？」

ーまあ、訳の分からないの含めたらもつとあるけどー

「それによって出来た時間で休息を取ると共に残り2つの特異点に向けて英気を養おうってわけさ。さ、重たい話は終わり終わり！ さ、飲むぞ飲むぞ〜ロマニ、ついてこーい！」

「全く…程々にね。じゃ、■■君」

あの二人、仲良いな。

それにしても……沢山の英霊と絆を繋げたんだな。

後輩と出会って、冬木に突然レイシフトして……その後も色んな所に行って色んな出逢いと別れを経験して……今、この瞬間があるんだよな。

「マスター、こんなところにいたんですか」

ー清姫……ー

「少し顔が険しいみたいですけど……もしかして、気分が優れないのですか？」

ーいや……ちよつと考え事をしてたんだー

「そうですか」

ー……ー

「……」

ーあの……清ひm「マスター」……何？ー

「マスターは……本当に私と結ばれて幸せですか？」

ー……ー

「ほら、私はこんな姿ですけどその……男ですし。本当はマスター……無理してるんじゃないかと思って」

ー……つたく。清姫、膝借りるぞー

「ひゃっ!? マママ、マスター!?!」

ー清姫の膝枕は落ち着くなー

「マスター……」

ーこんなに着ち着くのは……始めてだなー

「……ひゃっ!?!」

ー無理もしてねえし……これからもするつもりはねえよ。俺が好きなのはお前なんだからー

「マスター……」

ーさてと、皆の所に行こうか……って、清姫?ー

「……もう少し、こうしてたいです。」

ー……わかったよ。しばらくこのままいるかー

「はい！」

「……………なあ、清姫」

「……………なんですか？」

「……………キス、していいか？」

「ええ。もちろん」

清姫の唇は……………柔らかいな。

……………令呪を持って願う。

この幸せが……………途切れません様に

俺の清姫はお酒に弱いらしいんだが

「ふふ♪ マスター♪」

私の膝ですやすやとまるで幼子の様に寝息を立てるマスターは……本当に愛しいですね。

思い返せば……長い付き合いなのでですね。

あの『ふらんす』と言う所で出会って……マスターを忘れられずに『かるであ』とやらに行った時は少々強引についていった為なのか分かりませんが半陰陽になった時は些か驚きを隠せませんでした。

それでも……今こうして、マスターと相思相愛でいられる事にとても感謝しています。

「んう……きよひー」

「はい。愛しのきよひーはここですよ」

マスターはたまに夢で私の事を『きよひー』と愛称で呼んでくれます。

現実では照れ臭いのか『清姫』と呼んでるのですけど……そこがまた凛々しいマスターの可愛い所なんですけどね。

現実でも、いつか『きよひー』って呼んでくださいね。

「あら、姿を見いひん思うたらこんな所におったんかいな」

「酒吞さん」

「酒吞で構へんよ。それにしても……この愛らしい顔で寝とんのがねえ。今までよう音も上げずに頑張ってきたもんやねえ」

「本当ですね。本来ならこんなに傷だらけになる生活とは無縁ですのに」

本来ならこの人理修復を遂行することもなく、一般人枠のマスターとして安全な生活をしてたであろうマスターを見て、少しばかり胸が痛みます。

「マスターはんの無事を祈りたいんは山々やけど……私はこんな運命に感謝しとるんよ」

「ええ。不謹慎かもしれませんが私も今の運命には感謝しています」

だって、そうしないとマスターには会えなかったですからね。ね、

マスター？

「それにしても、清姫はんは愛されてるんやなあ」

「え？」

「だって、こんな傷一つないマスターを見て『傷だらけ』て言うことはこの服の中にあるマスターはんを見とる事やろ？」

「あ!?! いや……その………はい」

「ふふ……それで、裸のマスターは凄いいんかい？」

「ええ。見た目に沿わずかなりの殿方で……この前なんて、布団に押し倒してきて『清姫、お前の壊れるところが見たい』って、獣の様に鋭い眼差しで……」

「これは蕪蛇やったなあ……口から砂糖が出てきそうや」

「あら、失礼しました。って、酒吞が聞いてきたんじやないですか」

「ふふ……堪忍してな。お礼じやないけどこれを置いてくさかいに、後でマスターとゆっくり飲みなんし」

「宇宙焼酎『ゼットン』？ 変わったお酒ですね」

「何でも、マスターの好きな『特撮』とやらとの『ころぼ』の品みたいやねえ。それじゃあ、うちは戻るから」

「はい。ありがとうございます」

そういつて酒吞さんは皆の方へと歩いて行きました。

このお酒……美味しいんですね？

ちよつと一口………

………

………

………

ーん………寝てたのかー

周りはまだ明るいから眠ってたとは言えほんの少しか。

「おはようございます。マスター」

ーおはよう。清姫ー

「んっ……んう………」

目覚めの口付けをすると清姫は何時もより長く舌で求めてくる。

口の中をまるでアイスを舐める様にチロチロと舐めてから激しく求めてくる口付けを堪能すると太ももに二回撫でめ止める様に促す。

―そろそろ皆のところに戻ろつか―

「マスター……戻る前に一つよろしいれすか？」

―なんだ？―

「その……飲み物を飲みたいのですが……お手伝いしてもらえますか？」

―別に構わんが。で、どんなのだ？―

「マスターは立っているだけでいいので……」

―……？ って、清姫!?!―

「マスター……マスターのきのこ汁、清姫のお口に沢山ください」

―待て待て待て!! まだ明るい上に外だろ……って、酒臭!?!―

「ひつく……マスターのきのこ汁……ひつく……のまひえてえ……」

―え……えーと、その……後で部屋でな。―

「いやー! いまのむー!」

呂律の回ってない清姫が可愛い……じゃなくて

―ほら。少し離れているとは言えまだ皆いるかルアツ!?!―

「これりえ、周りからは見りやれないね?」

……上に乗る 清姫ちゃんを 見たならば はだけた着物 獣を

起こす……なかなか良い歌が読めた……じゃなくて!

―清姫! ちよつとタンマ!!―

「いやれふ。ほら、ましゆたーもきもひよくなりまひよ」

いや、これ全年齢版だし!?

ここから先はよいこは見ちやダメだし!?

何より外するのはまずいいいいいい……

「ふう……ごひひようひやまれました……ペロツ」

口の端のを舐めとる清姫が可愛い……

俺の清姫の揉み心地がいいんだが

ー……………

「あの……マスター」

ー……………

「んっ……その……」

ー……………

「それ以上は……恥ずかしいです」

ー……………天国ー

「……マスターのえっち」

清姫の膝枕は最高ござるなあ

つと、黒髭つてたかな。

いやー、それにしても気持ちいい、

このフィット感、柔らかさ……清姫の匂い

「ひゃっ!？」

そして、可愛らしい悲鳴

……マジ天国

六つ目の特異点、キャメロットを何時ものメンツで破壊しに行ったものの太陽のゴリラに苦戦して何百にも及ぶ脳内シミュレートをこなし、何とか押しきつて一時退却した疲労困憊の俺を待っていたのは黒塗りの高級車ではなく黒衣着物の嫁の膝枕だった。

『マスター……お疲れでしたらここでお休みになりませんか?』

マイルームで着物を少しだけずらして絶対領域を見せながら誘ってきた時は疲労困憊なのに思わずダイブするところだった。

「マスター、あーん」

ーん……あーんー

そうして、チョコを食べさせてもらったり。

「動かないでくださいねマスター……」

ーんっ……そこ……だめー

耳搔きをしてもらって、冒頭に至る。

ーなあ、清姫ー

「んっ、マス、ター……そこ、だめ」

「いいだろ？ 二人きりなんだから」

「でも、そこ……弱いんで、すっ!」

「……パンパンだな」

「それは……」

「お仕置きだな」

「っ……あああああっ!」

「全く、大袈裟だな。マッサージ位で」

「だって……沢山歩きましたからね」

そして、今は太ももが思ったよりふにふにでは無かったので軽く揉んでいた。

「よし、もう良いかな。清姫、またしてくれるか？」

「わかりました♪ ささ、清姫のお膝にどうぞ」

「さつきよりふにふにだな」

「マスターにしっかり下ごしらえされましたもの」

「……誘ってるのか？」

「……／＼／＼……はい」

「そうか」

「久々に……アレをするか」

「清姫、アレに着替えて着てくれるか？」

「アレですか？」

「ああ。頼む」

「……マスターのえっち」

「アレを着た清姫が可愛いのがいけない」

そんなやり取りをかわしてから清姫はシャワールームに入っていた。

別段、その場で霊基を練り直すだけなのだが何故かシャワールームに入るのがしばらくしてから暗黙のルールになっていた。

「マスター……お待たせしました」

「やっぱり似合うね……そのパジャマ。ほら、おいで」

少し緩めのパジャマを着た清姫を手招きし、抱き止めるとそのまま

唇を重ねて互いの唾液を舌を使って交換する。

部屋に響くのは俺と清姫の息づかいと水音、そして布の擦れる音。

ーさて、寝よっかー

「はい。清姫ちゃん抱き枕でたっぷりお休みくださいね」

そうして、清姫を抱きしめて俺は夢の世界へと旅立つのであった。

2時間後くらいに

俺の清姫と温泉に来たが理性が保てそうに無いんだが

ーはあく……癒されるなー

「そうですね。マスター……いや、〇〇さん♪」

ーその呼び方は反則だろー

「でも、ここには夫婦って事で来たのですから……ね」

ー……清姫ー

「ひゃつ！ マスター、どこ触って……んっ」

始まりはまあ……いつも通りだった。

『おや、〇〇。どうしたんだい？』

ーダヴィンチ。頼みがあるー

『なんだい？ この天才に任せたまえ』

ーちよつと清姫と温泉に行きたいからレイシフトさせてくれないかー

『うーん……今はロマニがないからなんともなあ。

そうだ。とりあえず、理由を聞かせてくれないかい？

話はそれからさ』

ー理由か……そんなものはないー

『へ？』

ーあるとしたら……そうだな。嫁との思い出作りだな。残るはあの魔術王だけだ。それが終わったら……皆、座に戻るかも知れないだろ？ー

『んー。一概にそうとは言えないけど』

ーだが、強制的に座に返らされる可能性もあるんだろ？

だったら、少しでも嫁との思い出が欲しいんだ。協力してくれー

『なるほどねえ……ま、いつか。30分後にまた来るといい。最高の場所に送ってあげるさ』

ー……感謝するー

と、そんな感じで二人きりでこの旅館に泊まっている。

「マ……マスター、そこばかり苛めないでえ……」
「……すまん」

「マスターのえっち……硬いもの、当たってますし」
「清姫がエロいのが悪い」

「……えっち」

このやり取りも、後何回続けられるのだろうか

「それにしても、意外ですね。何時もなら別々に入って絶対に一緒に入ってくれないのに」

「……部屋に露天風呂があるんだ。一緒に入るに決まってるだろ？」

「マスターったら……もう」

月明かりに照らされた清姫の笑顔が眩しい……

「あの……マスター」

「ん？」

「お背中……お流ししましょうか？」

「ああ。お願いするよ」

鎮まれ……鎮まれ、俺の本能

と、とりあえず風呂から出て椅子に座ろう。

「では、失礼して」

「ひあつ!?!」

「マスター!?!」

「ああ、少し驚いただけだから……気にするな」

「……危なかった。きよひーの手が触れただけで動揺するとはな。」

「んっ……んっ……」

「……吐息こぼしながら背中を洗ってくれるとか反則だろ。」

「よしっ……マスター、ちよつと待ってくださいね♪」

背中、まだ流して無いだ……ろ、と言おうとしたが背中にびったりと吸い付く感触のせいで何も言えなくなったが俺は悪くない。

「マスター。清姫ボディタオルはどうですか??」

「……」

「マスター?」

ー……………続けてくれー

「はい、マスター」

可愛さとエロさのクリティカルで死ぬかと思った……………てか、死んだ。

密着した肌と肌の間で『ぐちゅり』と音を立てる石鱈。清姫の吐息

……………落ち着け、落ち着け私……………ひゅあ!?

「マスター……………ここを硬くしてどうしたんですか？」

ー……………分かってるんだろ？ー

「はい。もちろん♪」

ー……………後で鳴かせてやる。それに昂ってるのは清姫もだろ……………当たってるぞー

「……………あうう」

ー……………愛してるぞ。清姫ー

「ずるいです。……………私も愛してます、マスター」

ー……………

「……………」

ー……………

「……………」

ー1回、スッキリしてからあがるとしようかー

「1回だけで終わりますかね……………」

ー……………染められたいのか？ー

「……………染められながら無駄撃ちしたいです／＼／＼」

ー……………変態めー

「あ、マスター……………駄目……………ああ??」

危うくのぼせるまで入ってたのは言うまでもないか。

俺の清姫とイチヤイチャしてるだけで幸せなんだが
……………

ー清姫、ほら口開けろー

「あーん???…んー、おいひい?? ほら、マスターもあーん??」

ー…………あむ。もつきゆもつきゆ…………美味しいな。清姫が食べさせてくれたお陰で更に美味く感じるなー

「もう…………マスターったら」

なんとか風呂から上がった俺と清姫は用意された料理に舌鼓を打っていた。

流石、旅館なだけあって出てくる料理一品一品が美味しい。

そして、清姫に食べさせてもらうと更に美味しい。

「あの…………マスター。少し試したい食べ方があるんですがよろしいですか?」

ーん? 別に構わんがー

「では、失礼して…………あむ。もつきゆもつきゆ」

ー…………ー

「もつきゆもつきゆ…………んっ

ー

確認を取ると自分のご飯を咀嚼し始める清姫を見ると不意に頬に手を添えられて唇を求められた。

今さら断る理由もないので応じると舌が入ってきてそれを伝って咀嚼していたご飯が入ってきた。

「んっ…………ちゆる…………ぐちゅ??」

ーんっ、あむ…………ぐくっー

舌を絡める度に清姫の唾液でどろどろになったご飯が喉を伝い、胃におちてくる。

「んっ…………んう…………んはっ?? どうですか、マスター??」

ー……………

「…………マスター?」

「ああ、すまない。一瞬、天国に来たのかと思ってな」

「もう、マスターったら」

「あの食べ方は……ホントに二人きりの時だけにしよう。……色々とヤバい」

「っ!?……はい／＼／＼」

もじもじする清姫が可愛い。

「でも、もう一口だけ貰おうかな」

「はぐん」

結局、残りは全部口移しで食べたけどなかなか美味かった。いろんな意味で。

「一番美味しかったのはとろろご飯だったな。」

決して清姫にこぼれたとろろを舐めとったのが一番美味かったからではない。

身体から出てる匂いととろろのぬるぬる感にノックアウトされた訳ではない!!

「夢……じゃないですよね」

「ああ、現実だ。とても綺麗だよ、清姫」

「ひゃあ……そんなところ捲らないでください／＼／＼」

「いいだろ。二人きりなんだから」

「うう……えっち」

夕飯も食べて一休みした俺は清姫を着せ替えて遊んでいた。

王道のメイドから女子制服にスーツに袖余りの体操服、男子制服の時は夏服で上のカッターシャツを水に濡らして透けさせる事も忘れてはいない。

今は巫女服を着せて楽しんでた。

「でも、清姫も断らずに着てくれてるじゃないか……着てみたかったんじゃないか?」

「それは……その……」

「嫌なら嫌って言っていいいんだからな」

「違います! むしろ……」

「むしろ?」

「色んな衣装でエッチなことされると思ってたて……」

「……………」

「ひゃっ!? マスター!?!」

「今夜は眠れないと思えー」

「っ…………どこ触ってるっ…………あっ?? やめ?? マスター??」

もう一泊するハメになったのは言うまでもない。

俺の清姫と温泉街d……散策

なんやかんやでもう一泊する事を決めた次の日

1日中溶かし合うのも一興だがどうせならと旅館近くの通りに来てみたのだが……

「Mas……〇〇さん、人が多いですね」

「そうだな。はぐれないように手でも繋ぐか?」

「はい♪」

フツ。もう名前呼びで動揺する俺ではないイッ!

「こうすれば絶対にはぐれないですよね♪」

「そうだな」

腕を組んでくるのは……ズルいよお。

「さ、何処に行きます?」

「決めてないな。とりあえずはこうやって愛する清姫と散策でもしようかな」

「マスター／＼／＼」

……まずは何処にしようか。

《ここからはピックアップだワン! 第三者のセリフは『』で表示するぞ読者諸君♪》

「イチイバルだとお!」

「〇〇さん?」

「イヤイヤイヤ……ここバリバリ日本の温泉街の弓での射的屋だよな? 何故にイチイバル!?!」

『地味に五月蠅いが答えてやろう。私の趣味だ』

「この赤い弓もか」

『無論』

「ボウガンタイプもあるのか」

『地味に普通の射的用のもあるぞ……派手に赤色だ』
「持ってけ」

『ダブルだ』

「清姫」

「はい？」

「ここで遊んでいくか」

「ふふっ。分かりました」

「この女将とは絶対に話が合うな。」

「……………この店と女将に」

「挑戦です♪」

『フツ。派手に返り討ちにしてやろう』

この後、めちやくちや放った。

「楽しかったな」

「ええ。女将さんが銭を弾いて当てた時は驚いちゃいました」

「確かにな」

「……………本人なワケ…ないよな」

「……………ん？」

「あはは……………」

かなり熱くなってたし不可抗力みたいなものか

「飯、食いにいくか」

「そ、そうですね」

「可愛い音だったぞ」

「もう……………○○さんのイジワル」

「あの蕎麦、美味かったな」

「ええ。美味しかったですね」

「次はわんこそばにでも挑んでみるか」

「その時は連れて行ってくださいね」

「勿論。だから、帰らないでくれよな」

「はい」

「……………」

「……………」

「約束だからな」

「はい。約束です」

《ピックアップ終了だワン！ 報酬に人参を貰おうか》

「マスター。そろそろ」

「何度もすまない。わがまを聞いてもらって」

「……マスター？」

「あー……清姫。最後にもう1つ寄っていかないか」

「？」

不思議そうにこつちを見てくる清姫に微笑んでから通信を切り、俺と清姫はある所に向かうことにした。

「着いたぞー」

「着いた。って……何もありませんよ？」

「ああ。何も……だからこそ相応しい」

俺はそう言いながら清姫から少し離れてから向かい合って令呪の宿る手で拳を作り、突きだした。

「令呪を以って命じる。あのソロモンは必ず倒す」

あと二画

「重ねて令呪を以って命じる。決戦が終わったら……皆で騒ごう」

あと一画

「重ねて令呪を以って命じる。先程二つの命令から清姫を除外する」

効果対象が多いからきつとまともに機能してなさそうだけどそれはどうでもいい。

「清姫。今から言う事はマスターじゃなく、ただの○○○と言う1人の人間としての言葉だ」

「……はい」

「俺の魂を以って望む。清姫……俺の隣で生きてくれないか？」

「……はい」

俺……○○の魂を持って望む。
願わくば……永遠に

俺のマスターとしての役目は終わったのだが…

温泉旅行から数ヶ月

俺達、カルデアのメンバーはついにソロモンと名乗っていた存在を倒し、新しい歴史を紡ぐ事の出来る世界を勝ち取った。

『さようなら、■■君。この旅の終わりとこれからの人生に、祝福を』
失ったものもあるけどね。

ーさて、これで最後かなー

この長い旅の間、使っていた部屋は片付けたお陰かそこに人がいた事が無いかの様に見える。

「ごめんね。せつかくの英雄様にこんな扱いで」

ー英雄様なんて呼ばないでくださいよ。ここには本物の英雄達がいたんですからー

後ろから声を掛けてきたダヴィンチ女史とそんなやり取りをしやがら俺は、ソロモンの名を騙っていたモノとの戦いの後の事を思い出していた。

縁を繋いでいたサーヴァント達は『人類史の存続』と言う未来が確定した時点で契約内容を完了し、一部の物好きを残し、座に還っていった。

…とは、言うものの本当に還った人数の方が少ないらしい。

大丈夫なのだろうか。

「それもそうだね。でも、覚えておいてね、■■。君は世界中の人類を救った。

それは今までの英雄でも成し遂げられなかった凄いことなんだから」

ー今でも信じられないですね。俺が世界を救ったなんてー

「それでも、事実さ。だからこそ、こうしてもらえないのさ」

ー何処の世界にもプライドの高い上官は居るもんですねー

今までいた部屋を片付ける事になったのは魔術協会の人間達から俺を逃がす為なのだ。

「まったくだよ。まあ、送り込んだ魔術師は事故でほぼ全滅。その間に素人の君が世界を救ったなんて報告されたから、君を困って飼いで殺す算段なんだろうけどね」

「真っ向から叩き潰しても良いんですけど…俺は非力ですからね」

「何を言ってるんだい、数多のサーヴァントと契約してる癖に」

「【してる】じゃなくて、【してた】ですよ。今は俺じゃなくてカルデアそのものがマスターみたいなものじゃないですか」

沢山のサーヴァントが座に還らず、ここに残った時、魔力消費の都合から殆どのサーヴァントにはカルデアそのものと契約してもらった。

特異点修復の際は異常事態及び対応できる者が俺しか居なかったのでもリソースを全て注ぎつけたのだが今となっては他の者にもリソースを割く必要があるから前のようにはいかなかった。

「それでも、皆が君に力を貸してくれると思うけどね」

「あんまり頭使いたくないですよ、面倒なので」

「でも、君はなんやかんやで色々巻き込まれるタイプに見えるけどね」

「勘弁してくださいよ」

「ダヴィンチ女史と話している内にかヘリポートの出入口まで来ていた。」

「逃がす為、とは言え周りは外界から断絶されてる環境なので買い出し用の輸送ヘリに相乗りしてここを去る手筈になっているのだ。」

「ダヴィンチ女史、今までありがとうございました」

「むしろ感謝を言うのはこちらの方さ。ところで、マシユに会わなくても良いのかい？ 今生の別れになるかもよ」

『よっ、この女誑し』なんてからかうダヴィンチ女史には悪いけど…さよならを伝えに行こうとはしたんだよ。

でも…その…手にリードと首輪を持ってハイライトの無い目で俺の名前を呼びながら歩いてるのを見ると…：…ね？

「ダヴィンチ女史、飼育しようとしてくる後輩って…怖いですねー
ウン、ソウダネ」

ダヴィンチ女史も何が言いたいか解ったのか若干目から光が消えてたがそんな事知らない。

「では、ダヴィンチ女史…ごきげんようー」

「うん。君も元気だね。次に会うときは皮を被ってない素面の君と話したいね」

「…：…知ってたんですねー」

「これでも人を見る目には自信があってね」

「そつすか…じゃ、次に会うとしたら考えとくつすよー」

「お達者でー」

ヒラヒラと手を振るダヴィンチ女史を背に輸送へりに乗り込むとハッチが上がり、改めて見たカルデアの全体が見えなくなっていく。

「さよなら、非日常の日々よー」

「……………」

「行っちゃったねえ…」

「そうね」

「全く、置いてくなんて何様のつもりかしらね」

「何様でもねえ。アイツはアイツだ」

「おや、珍しいメンツだねえ。カーミラに黒ジャンヌに黒クーパーリン」

「そうね。あの子はお気に入りだったもの」

「私のやることにノッてくる事もあった優秀なダメマスターだったわ」

「俺のこの姿を目玉、キラキラさせて見る変わり者はアイツくらいだったからな」

「ふーん（こんなに愛されてるなんてね。こりや再会は近いかもね■」

■君」

「……………」

「ん〜…これからしばらく空の旅か。景色は見えないけどー

「それでしたら、私の膝でお休みになりますか？」

空の旅を楽しむ…なんて事は出来ないものの隣には最愛の清姫がいる。

こんなのも悪くないや

「それも良いんだけど。清姫も今のうちに休んどいたら？ 受肉してるから今までと勝手は違うんだしー

「心配なく。私がしたいだけですから」

「そうそう、実は言い忘れてたんだけど魔術協会から逃げる理由がもうひとつ。

決戦から数日経ったある日、清姫が受肉してる事がわかった。

検査の結果、サーヴァントの力や能力そのままに一人の人間として存在が確立されているらしい。

そんなのが魔術協会に知られて実験体として連れて行くような確実に新たな特異点にするレベルで暴れる自信があった。

それを避ける為、そして清姫を守るために逃げる事にしたのだった。

「う〜ん…でもなあー

「それに…」

「ん？ー

「マスター…いいえ、■■■■さんの家族に会う前に…■■■■さん成分を補充したいな…なんて」

「クツソかわいいかよー

「へ？ えっ!? ひゃあっ!?!」

「お休みー

「えっ…あっ…お休みなさい、■■■■さん」

「さて、では私も…」

「あっ！…そこは駄目ですよ…私だって我慢してるんですから我慢

してください！」

「ふふっ、こういうのは自由競争…早い者勝ちですよ♪」

「でも…」

「それにも…私にも子供が出来たら貴方の子供って事にもなるんですよ」

「……………くっ」

「私は夏の貴方で貴方は普通の私……………ここは二人であることを活かしたぶれいを…」

「…きよひー…愛してる…zzzzzー」

「…我慢しましょうか、私？」

「…そ、そうですね…ところで、少し奥の方を見てきますね」

「あまり騒がしくしては駄目ですよ」

「わ、わかってますよ…」

ま、清姫一人だけではないんだけどね。

俺と清姫の事なのだが…（設定）

俺と清姫の事なんだが（設定）

・マスター（○○ ■■■）

性別：男

年齢：18

一人称：俺、私

数奇な運命を辿った本作の主人公

高校卒業から大学入学の間にスカウトされ、カルデアに行き、紆余曲折を得て人里修復を託され、完遂した。

歴史はそこそこ詳しかったが流石に英霊全員は知らなかった。

清姫とは第一特異点からの付き合いで第五特異点突入前に恋人となった。

男になってた事に関しては『まあ、過去の偉人の性別なんてよく変えられるし』と別段気にしてなかった。

清姫を意識し始めたキツカケにも心当たりはなく気付いたら性別が気にならないくらい好きになっていた。

善人かと言われると肯定はしにくく、どちらかと言えば混沌・悪側の人間。

カルデアからのオーダーと焼却による好きな作品の続きが見れないことへの怨みから人里修復を成し遂げた。

酒は弱いし、飲めない。酒呑童子の吐息で酔い潰れた事がある。現在は耐性をつけたがそれでも飲もうとはしない。

人里修復を経て、現在は協会の手から逃れるのと修復された日常へと帰ろうと新たに出来た恋人達と共に故郷へ移動中。

・清姫（通常）

性別：男

一人称：私

本作のヒロインにしてある意味では時空の歪みの原因。

オルレアンでの出会いからカルデアに押し掛けた際に何故か体が男になっていた。

骨格がすっかりし、あつたものがなくなり、なかつたものがある身体になった以外は変化はなかつた為、違和感に気付いた時は驚いたがマスターを好きなことに違いは無かつたので気にしなかつた。

最初は安珍の生まれ変わりとして信じて愛を向けていたがマスターのとある行動に恐怖と猛省をし、マスターを一人の人間として見たうえで惚れてしまい、行動を開始した。

この時の恐怖と猛省は座に刻みこまれる程で水着の彼女が召喚された際は最初から安珍ではなく、マスター本人に惚れていた。

人里修復後に受肉した事が判明。

スキルと能力値は変わらず、そのまま受肉した様子。

現在は、恋人ともに彼の故郷へと移動中。

カルデアから去る前にダヴィンチ女史に頼んで『鐘囲 清姫（かねい きよひめ）』という戸籍を捏造してもらった。

関係を持つてからも嘘には敏感だが、昔と違って融通も聞出し、たまに本人が嘘をつくというよりは明確な答えをはぐらかす事も。

男の身体になったのはカルデアに押し掛けた際の途中で

『私が女だから安珍様が去つたのなら殿方の身体であれば』

と、僅かに考えたのを座が感じ取つたから。

起こるべくして起こつた事故であつた。

・清姫（水着）

性別：女

一人称：私

ある時に召喚されたある意味では『正しい』清姫。

とある出来事で恐怖と猛省が座に刻みこまれていた事で召喚された時から安珍ではなく、マスター本人に惚れてた。

通常の方とは違い、女性ということを生かしたアプローチを多用しては通常の方に嫉妬されていたがマスターには効果がなかつた。

（マスター曰く、顔が同じだけの別人だから清姫に悪いとのこと）

その振る舞いも相まって更にマスターを好きになった。

第六特異点の後に通常の方とマスターの三人め話し合った上で晴れてマスターと恋人になった。

人里修復後に受肉した事は清姫と同じ。

スキルと能力値は変わらず、そのまま受肉した様子。

現在は、恋人ともに彼の故郷へと移動中。

カルデアから去る前にダヴィンチ女史に頼んで『鐘囲 水姫（かねみずき）』という戸籍を捏造してもらった。

二人で相談した上で戸籍上は通常の子の姉となっている。

対外的にはマスターの彼女というところになる。

（メタ的な話をする結構『ある』族だったのでどうするか迷った結果、そのままお出ししたのである。）

・主人公（深）

実は自分という存在をさらけ出すのが怖く、相手によって話や振る舞いを変えていて、家族にさえ本性をさらけ出したことはない。

酒が飲めないのも酔って本性が出るのを避けるためである。

カルデアから去る際のダヴィンチ女史からの指摘に返したときもバレた時の仮面を被ってかえした。

・・・
だけでは、ない。

俺の故郷に清姫達と来たわけだが…

「ここがマS…〇〇さんの生まれ育った町なのですね」

「降りた所と比べたら何もない町だけどねー

「私は好きですよ。なんというか…のんびりしてて」

「ははっ。それじゃ、行こうか二人ともー

カルデアを去って数日。

俺達は無事に日本に戻り、電車を乗り継ぎ、故郷へと帰ってきたのだった。

この時に知ったことなんだが、カルデアを去る前にダヴィンチ女史が色々と手をまわしたらしく、通帳には見たことのない額が入っていた上に、二人には分厚い封筒が渡されていた。

：不安になって二人にも口座とカードを作ってもらった。

ダヴィンチ女史にはしばらく頭が上がりそうにないな。

「とところで二人とも、お腹空いてない？」

「そうですね。実は少しだけ」

「私も少し…」

「まあ、お昼時だし何処か食べに行こっかー

俺の問いかけに恥ずかしそうに頷いた二人を連れて、久々に故郷の飯屋へと向かうことにした。

「蕎麦処…天世？」

「蕎麦ですか。いいですね」

「蕎麦以外もあるし。昔から良く来てるんだよ…流石に恋人と来るには華が無いとは思うけどねー

「そんなことないですよ」

「ええ。趣のあるいいお店だと思いますよ」

『蕎麦処 天世』、子供の頃から来ているこの店に来たのは純粹に懐かしい味が食べたくなつたのと…故郷に帰ってくる時は最初にここで食事をするのがルーティンになっていたからだ。

「とりあえずは入ろうか。おやつさん、座敷は空いてるかい？」

「らっしやい。見ての通り、座敷どころか何処でも空いてるよ。好き

なところに座りな」

「だってさ。何処がいい？」

二人が決めた場所に座ってメニューを眺めている二人を眺めているとおやつさんがお冷やを持ってきた。

「あいよ。注文が決まったら呼んどくれ、べっぴんさん達」

「ええ。どうもありがとう」

「ふふっ」

「姉さん：わかりますけど」

俺が声を作って礼を言えば、二人が笑っていた。

「○○さんったら、悪い人ですね」

「店主さん、気付いてないですよ」

「だろうね。ま、ちよつとした茶目つ気だよ」

二人がメニューを決めている間、久々に訪れた天世を見渡していた。

世界からすればどれだけ経っているのか分からないけど：俺からすれば二年振りのこの店はなんとなく懐かしかった。

「○○さん。決まりましたよ」

「そう？ 水姫は？」

「私も決まりましたよ」

「了解。おやつさん、注文」

「あいよ。ご注文は」

「私は親子丼と掛け蕎麦の小盛を」

「私は天井と掛け蕎麦の小盛で」

「親子と天が一つと掛け蕎麦の小が二つ。黒髪のお前さんは？」

「ざる蕎麦の大盛。薬味葱多め。とりあえずはそれだけ」

「あいよ。時間かかるが構わないかい？」

「ええ。冷えるだろうから二人のを先にしてくれるとありがたいね」

「承知。ちよいとお待ちを」

まだ気付いて無さそうだな：おやつさん。

「ところで、この後はどうするつもりですか？」

「―とりあえずは家に行こうと思うんだけど…どうかな?」

「まあ! それは楽しみです。ご両親に挨拶するのは当然ですものね!」

「姉さん、落ち着いてください。それに…ご両親じゃないでしょ」

「あ…そうでした。ごめんなさい、〇〇さん」

「―気にしてないから構わないよ。それにしても姉さん呼びが板についてきたね、清姫」

「…色々と仕方がないと割りきらないといけませんから」

「ごめんね。本来なら私が二番なのに」

「…この身体なので色々と面倒事が予想されるのは目に見えていますからね。仕方なくですよ」

「―…ま、一緒に寝れる可能性は上がるけどね」

「!!…えへへ。一緒に同じ布団で」

「…ちよろい。まあ、嬉しいのは一緒なんだけどね。」

水着の方…もとい水姫もそんな顔しないのどうせ寝静まったらこつちに来るつもりでしょ。

「はいよ。掛け蕎麦二つお待ち。飯モノはもう少しお待ちを」

「ありがとうございます。では、お先に」

「いただきます」

「―はいよ」

二人が美味しそうに食べるのを眺めていると、思い出の場所に新しい思い出が増えた気がした。

俺の清姫達と実家に向かつてるわけなんだが…

「美味しかったですね」

「ええ。また行きましょう、〇〇さん」

「勿論。ネタばらしもしたいからね」

『蕎麦処 天世』で食事を終えて、俺達は俺の家へと向かいながらかつては賑わっていたらうアーケード街を歩いていった。

営業を続けてる店舗はまばらに残っているが、精肉店や八百屋に服屋、電気屋といったアーケード街と共に年を重ねたと分かる店ばかり。

よく言えば人情味溢れる、悪く言えば古臭いアーケード街だけど二人と歩くだけで、昔と違う楽しさがあった。

「ちよいとそこの美人さん達。揚げたてのコロッケ、食べてかないかい！」

ふと、声のする方に三人で顔を向ければ、肉屋の恰幅のいいオバちゃんが笑顔で手招きしている。

「せっかくだし、食べよっか」

二人が笑いながら頷けば、そのまま肉屋に行くことにした。

「あんら、近くで見たらより美人さんね。モデルさんかい？」

「んなお世辞はいいから。この時間なら牛コロッケでしょ。とりあえず3つ。それと牛小間5000円分と脂身5個包んどいて」

「はいよ。それにしてもどれが揚げたてか知ってるなんて誰かから聞いたのかしら、ウチはコロッケだけでも5種類あるのに」

コロッケを個別に包んで渡してもらってから、肉の用意をするオバちゃんを待ちつつ、二人に渡した。

「ほら。二人とも、熱いうちにどうぞ」

「はい。いただきますね」

「ありがとうございます」

二人の可愛さを噛み締めながら自分も久々のコロッケを食べることにした。

サクサクの衣と牛ひき肉の甘さと旨味が引き出されつつも芋と喧

嘩せず調和のとれた味。

カルデアにいた時に食べた小洒落たコロッケとは違う、片手間に摘まむような惣菜としての素朴なコロッケ。

「まあ……」

「これも美味しいですね！」

二人も美味しそうに食べて感動してるのを見てると……カルデアに行く前には縁がなかった青春って、こんなことを言うのだろうなって思えてくる。

「はっはっはっ！ 良い顔で食べてくれるねえ。好きなのもう一つサービスしちゃうよ！」

「いいんですか！」

「勿論さ。オバちゃんからのサービスだよ」

「ありがとうございます。どれにしますか、水姫？」

「そうですね、清姫はどれにします？」

二人で楽しそうに揚げ物をどれにしようか悩んでるを眺めていると、不意にオバちゃんから声をかけられた。

「あいよ。牛小間5000円分に脂身五個。ちよいとオマケしとくよ」

「ーどうも。それじゃちようどでー」

「あいよ。5000円ちようど。ほら、お嬢ちゃん達もどれにするか決めたかい？」

「はい。私は先程の牛コロッケで」

「私はメンチカツで」

「はいよ。清姫ちゃんが牛で水姫ちゃんがメンチね。で、嬢ちゃんは？」

……あ……オバちゃんも気付いてないな、これ。

ま、それならそれでありがたく。

ーでは、山吹小判カツでー

「はいよ。今から揚げるから少し待ってておくれ」

ーそれなら、お肉冷やしてもらえます？ー

「出る時に忘れずに言っとくれ」

∞ 数分後 ∞

「はい。牛にメンチ、揚がったよ！」

「―どうも。ほら、二人とも―」

「ありがとうございます」

「ほら、山吹小判も揚がったよ」

「―どうも、オバちゃん―」

「それが山吹小判…」

「確かに小判っぽいですね。けれどどうして山吹？」

「―それはね…イッタ!?!―」

二人に由来を説明しようとしたら頭を軽くオバちゃんに叩かれた。

「昔、○坊が小学生の頃にね。小遣い握りしめてこう言ったのよ『山吹色のカツをください』って。」

で、『山吹色ってどういう事だい?』って、聞いて生まれたのがこれ
「や」

「―時代劇で、山吹色のお菓子ってあるだろ?―」

「ええ。賄賂の隠語でありますね」

「―昔は、山吹色イコール分厚いものって思ってた。てか、もう子供じゃないんですけど―」

「はっはっは! オバちゃんをからかった罰だよ。それにしても半年で随分変わったわね。二人も美人な恋人連れてきちやって、色男ね。」

髪が長くて女の子と間違えちゃったけど、訂正しないアンタも悪いからね」

「―はいはい。悪うござんした―」

ぶつきらぼうに謝っていると二人がクスクスと笑い始めた。

「ふふっ。○○さんにもそんな時があっただんですね」

「なんというか、可愛らしい一面が知れて嬉しいです」

「―二人とも…そんなに笑わなくても―」

「おや。恋人に隠し事は良くないねえ。二人とも、よくお聞き。○坊は昔ねえ…」

ー ババア！ 肉！ それと山吹小判、今はいくら！ー

これ以上は堪ったもんじやない！ こういう時はさつきと行くに限る！

「照れちやつてまあ。ほら、お肉。それと山吹小判のはいらないよ。恋人を連れてきた○坊へのオバちゃんなりのサービスだよ」

「ふふ。照れてますね」

「オバさん。今度こつそり聞かせてくださいね」

「ええ。嬢ちゃん達もまたおいで」

…クソツ！ ババア、余計な事を!!

肉を受けとつてから足早と去つたのは逃走じゃない！

肉が痛む前に目的たる実家に帰るためだからな！

「○○さんの昔話…今度聞かせてくださいね」

「勿論、私にもですよ♪」

ーそのうちねー

…二人に両方から腕を組まれた上でささやかれた程度でゆる…ゆるさ…くつ、いい匂いするなあ。